

歴史と観光

山 崎 益 吉

History and Tourism

Masukichi YAMAZAKI

Summary

These days, people are more interested in history and historic places. Because these places will be resistered with the wold heritage in the future. Recently Buddhist Monuments in the Horyu-ji Area and Iwami Ginzan Silver Mine and its Cultural Landscape were reresisted with the world heritage. Tomioka Silk Mill and the places of histric interest are waiting to be resisted too. Moreover Japanese peopole, from Hokkaido to Okinawa are very interested in the historic places where they live. The places of historic interest bring many tourist. Therefore in this article, I will discuss what the places of histric interest and tourism are , considering the plan of Tomioka Silk Mill(Tomioka ,Gunma) and Obata Castle Town (Kanra,Gunma).

1. 歴史への関心

近年歴史（的遺産）への関心が高まっている。その一つに世界遺産への登録という背景があろう。「法隆寺の仏教建造物」(*Buddhist Monuments in the Horyu-ji Area, 1993.*)を皮切りに、最近の「石見銀山遺跡とその文化的背景」(*Iwami Ginnzan Silver Mine and its Cultural Landscape, 2007.*)に至るまで11の世界遺産が登録済みである。年を追う毎に日本中が世界遺産への関心に浸っているとと言っても過言ではない。このことは歴史や歴史的遺産を通して日本の歴史を見つめ直すという点では大いに意義がある。歴史に関心が集まることは地方分権、地域主権が叫ばれるさなか異議なしとしない。世界遺産への登録ということで地域に光が当てられるならば、仮に登録されなくとも結果的に地域が光ってくるから、世界遺産への関心は大いに推奨しなければならない。

だが、ここにきて平泉ショックは隠せない。「平泉の文化遺産」(岩手県)が再調査になった

からである。効用（世界遺産価値）遞減の法則が働いていると見ていい。ユネスコによる総量規制という問題もあるが、誰が見ても世界遺産にという価値が次第に制限されてくることは間違いない。世界遺産への登録ということが全面に押し出され、問題が複雑多岐になっているからである。これまでの暫定登録の実情がこのことを端的に物語っている。「古都鎌倉の寺院・寺社ほか」（平成4年）を始め「富岡製糸場と絹遺産群」（平成19年）などが暫定搭載入りし、暫定リスト記載が適当であるとする二件を含めると14件が世界遺産を目指して鋭意準備している事になる。さらに「学びの文化を世界に」をキャッチフレーズに「弘道館と偕楽園」（茨城県）、「足利学校」（栃木県）、「閑谷学校」（岡山県）、「咸宜園」（大分県）を世界遺産に準備を進めている地域もある。茨城県、栃木県、岡山県、大分県と四県にまたがり、学問的には儒教・朱子学を根底にすえているが、水戸の尊攘思想と他の三者の整合性はどうかという問題は残る。この背景に世界遺産の登録準備が大きく変化しているという思惑がある。壮大な建物やヨーロッパ諸国の偏りを是正することが求められ、従来十分反映されなかった分野にチャンスがあるというユネスコの世界遺産委員会が、登録数の多い国より少ない国、単独の遺産より複数の遺産、狭い地域より広い地域など、新たな種類の遺産を付け加える必要があると打ち出したからである。こうした状況の下、世界遺産にという思惑が働き、仏像ブームなども相俟って歴史、歴史的遺産への関心が高まっていることは否定できない。

北は北海道から南は九州沖縄まで日本中が世界遺産登録に向けて準備していることが伺える。歴史、歴史的遺産への関心が高まらざるを得ない状況にあることは確かである。だが、中身に焦点が絞られなくてはならないというごく当たり前の問題が生じてきていることは否めない。国や地方が暫定入りリスト搭載を承認したり、暫定リスト記載が適当であると考えるのは自由である。国内の歴史的関心呼び起こすよい機会であるから国内に限って言えば何の問題も起きない。地域ナショナリズムを高揚するには絶好の機会であるから結果的には地域分権、地方分権に沿うものであろう。

そこで筆者が関わっている「富岡製糸場」、それに筆者の住む「城下町小幡」を引き合いに出しながら、本来の歴史、歴史的遺産と観光とは何かを考えてみることにしよう。

2. 国の光を観る

「他国との交通なしには、その国は高い教養と文化に到達することは出来ない」とプラトンが言っているように、このことは現在でも当てはまる。なぜならば、そのよい面と悪い面に関する十分な知識を持ってないから判断に苦しむわけである。古代ギリシャにあってギリシャの植民地にすぎなかったイオニアに高い文化が開いたのは他国との交通によってよい面に関する十分な知識を取り入れたからである。当時イオニアにあっては他国との交通が盛んであった。陸路では小アジアへ行くことが出来、海路ではエジプトに渡ることが出来るので、異国で観てきたことをよく話して聞かせるという習慣が根付き、イオニアに高度な文化が発達したと言われている。当時異国で風俗、習慣など観ることをイオニア語で*θεωρία*と言った。だが、以前観てきたことと次に観たときとは様相が変わっていることがよくある。なぜ違うのか。政治情勢が変化するからである。すると以前観てきたことが正しいのか。それとも今観てきたこと

が正しいのか。あるいは双方とも正しいのか、判断に迷う。それゆえ何故変わったのかよく検証しなければならない。後に探求して確かめることをイオニア語で*ιστορία*と言った。変化する姿は政治情勢によって引き起こされる。前の政権と後の政権とでは政治的手法が異なるため、違った姿を取ることは歴史上よくある。ある政権がIdealbild（理想像）を求めて*ιδέα*（姿）を追求しても政権交代で大きく異なった姿が追求される。問題は政治情勢の変化がなにを理想像とするかである。おそらくどの政権も理想像を追求するに違いないから、そのためにもそれを検証する必要があった。*ιστορία*とはまさにnachforschen（後で検証）するという意味である²⁾。歴史が重要であるかが分ろう。そこで、富岡製糸場が世界遺産登録に向けて歴史的検証に耐えられるか、本来の歴史と観光とは何かを見ておくことにしたい。現在進められている「富岡製糸場と絹遺産群」はもとより世界遺産登録に向けて準備しているそれぞれの地域への警鐘にもなるゆえ、忌憚なく述べておこう。

(1) 富岡製糸場の取り組み

富岡製糸場が世界遺産への暫定リストに掲載されたのは平成19年である。ユネスコの広域分野を受け富岡製糸場単体ではなく絹産業遺産群が付け加えられた。「富岡製糸場と絹産業遺産群」が正式な名称である。絹産業遺産群は群馬県全域に亘っているため、富岡製糸場に限定して考察しておこう。

世界遺産への暫定登録への仲間入りしてから製糸場を訪れる観光客が激増している。よく観ておこう。富岡製糸場は近代日本の出発点として強力な国造りの一環として明治新政権によって開始された。西洋列強の脅威に屈しないためにも、強力な国造りの礎は強力な経済からという発想の下、富国強兵、殖産興業に組み込まれた。「夷をもって夷を制す」富国論である。確かに幕末から維新にかけて植民地、半植民地の脅威に直面していたことを考えれば、かつて西洋列強がやったことと同じ方法で国家的独立を図らなければならないとする維新政府の真意はよく分る。江戸時代から養蚕が盛んであった群馬県に国家的プロジェクトである製糸業が開始

されたとしても何ら不思議ではない。2000人程度の寒村に突如として出現した巨大製糸場は国威発揚に相応しいものであった。100メートルを超える東西繭置き場、140メートルもある繰糸場どれも寒村の度肝を抜くものであった。製糸場をめぐってまちづくりが展開されてきた。周辺は富岡製糸場の歴史でもある。世界遺産というからにはそうした遺産も同時に整備することが肝要で、製糸場の格を高め

写真 1



富岡製糸場（浅香百太郎氏提供）

ることにもなるはずである。ところが、富岡製糸場とともに歩んできた市街地は駐車場に変貌している。なぜこうなったのか。まだ暫定リスト入りしただけの段階で、将来果たして世界遺産に登録されるかどうか未知数にもかかわらず登録済みの政策が断行されたからである。

なぜそうなったのを検証しておこう。確かに富岡製糸場の優れた姿はIdealbildとして現存していたはずである。民間企業三井に払い下げられてから原製糸、片倉製糸へ、その後時代の流れに抗しきれず片倉製糸が操業停止となり、その処遇が問題となったおり、富岡市に移管された姿が追い求められ手を加えず理想像として現存していた。なぜ変貌きたしたのか。政治上的の変化があったからである。政治 (πολιτικά) によって政策が変わり、以前と状況が異なってしまう。異なった姿になっている。変遷が歴史であるならば歴史的事実を貶めていると言っているかもしれない。以前の姿が正しいのかそれとも以後のそれが正しいのか。誰の目にも明らかであろう。

この間の経緯をNPO法人「富岡製糸場を愛する会」は平成22年3月の「富岡製糸場整備活用計画」に対して、平成22年4月27日理事決議として「富岡製糸場の整備活用計画について」(計画書に対する意見)として次のような提言を行っている。³⁾「富岡製糸場を中核とした地域活性化を図ることの視点が極めて不十分。産業文化系文化遺産の活用に関する住民の参加と地域振興策が見られない」と全体を手厳しく批判している。歴史的認識の齟齬などが念頭にあるからであろう。計画書の緒問題点を3点に絞っている。①「周辺市街地との一体整備活用計画が欠けている」点が強調された。製糸場内部のみに目がいき外部周辺市街地、まちづくりの視点が欠如しているという。さらに製糸場と周辺地域が上げられている。具体的には製糸場北・東・西の周辺地域を含む市内の商店街や歴史的文化財との一体的な活用が重要であると指摘しているが、同感である。現状は製糸場との違和感ばかりが目につき、製糸場単体だけでは富岡製糸場の価値が半減しかねない。②として「住民に親しく開かれた形の活用が不十分」という。製糸場と地域住民の最大のネックはブロック塀の存在である。ブロック塀によって製糸場と周辺住民との高い壁が出来てしまって親しみが湧かない点が指摘されている。そこで北側の一部内側を約5メートルの幅で緑地化し地域住民との一体感を図り、「全市民の憩いの場とすると共に外側から見た製糸場の価値を飛躍的に高め多くの観光客に向けて製糸場と街の魅力も高まる」。③富岡製糸場と地域住民との一体感という点では「日本で最初の富岡製糸」と謳われている割には一体感がない。市民には製糸場はあくまでも蚊帳の外の存在でしかないというのが実情のようである。スタート時には国家戦略として市民とは関係なく創設され、民間に払い下げられた時点においても垣根越しの存在でしかなく、愛着をもてという方が酷である。市民はさめた目で見ているというのが実情ある。製糸場と地域住民の一体感を強調してもおいそれとはいかない。行政とて同じである。民間の企業ゆえ行政当局が干渉するわけにはいかないという立場を貫いてきた。むしろ戸惑いの方が多かったのではなかろうか。それゆえ製糸場そのものも、行政当局も、市民もようやく重要性を認識するようになったが、まだ違和感を持っている市民が多いというのが実情のようである。「愛する会」がしきりに一体感を訴えている理由がここのあるわけで、製糸場の世界的意義を原点に立ち返って考えるきっかけを提供したことに意義があるとみねばなるまい。真の歴史とは何か、国の光を観る観光とは何か、観光客を尚ぶとはどういう意味なのかを改めて考えさせてくれるのではなかろうか。歴史認識、観光は

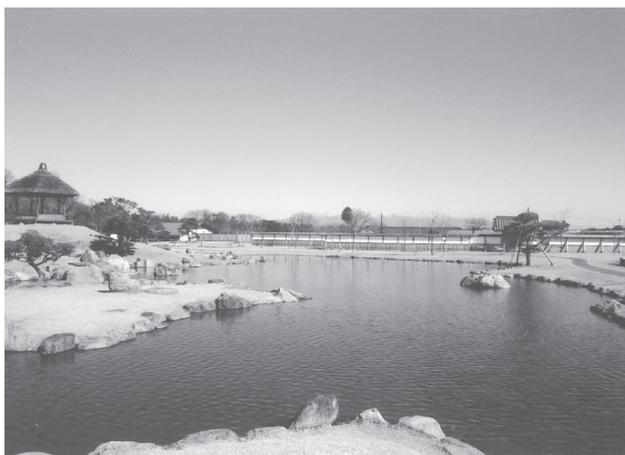
それほど単純ではないことが読みとれよう。最後に意見書は日本産業革命の原点としての意義、「市民が支える文化遺産」を強調している。意見書の大約は以上である。⁴⁾ 歴史、歴史的遺産、観光とは何か。ここから富岡製糸場のあらたな取り組みが始まると言っているであろう。

(2) 城下町小幡の整備

では、*πάντα ρεῖ*（変転して止まない）「歴史的事実」としての姿を理想像と想定し追求することは可能なのか。近代社会にいたるとIdealbildから大きく逸脱するためまったく異なった理想像が現れることがよくある。政策によって以前追求した歴史的事実と大きく異なってしまうからである。あくまでもある時点での姿であり政策が加わってのそれとは別物である。だがここで紹介する楽山園を中心とする城下町小幡はまさにプラトンの追求する姿である。政治的な出来事が加わっても一貫して城下町小幡の理想像を放棄しないで町の顔として仕立てている。終始一貫して理想的な姿を実現しようとしている。理論、政策、歴史が一体として貫徹していることが知れよう。甘楽町の場合、城下町の整備は歴代の首長が一貫して織田信雄らの精神を理想像として守っている。首長が変わっても次の首長はそのまま継続して続行している。政権が交代しても前の首長を受け継ぎ、整備にあたっては大きな政治的な出来事にはしない。一貫して城下町小幡が追求されている。歴史を歪めたのでは魅力ある観光（地）にはならない。ましてや観光客を尚ぶことからはほど遠いからである。

では、城下町小幡の場合どこに出発点があるか。原点は名園楽山園にある。⁵⁾ 楽山園とは文字どおり山を楽しむ園、山を楽しむ心境という意味である。では、山を楽しむ心境とはどういう意味か。山の対が川である。川が流動的なのに比べ山は不動のごとき泰然自若としている。実は山のごとくは仁を表現している。「動かざること山の如し」というわけである。仁は孔子の晩年に符節している。信雄はどうか。信雄は武将としては劣り、一般に歴史的評価は極めて低い。会社にたとえば駄目な経営者である。だが、信雄は文化人で、茶を嗜み、能を舞い、楽山園を残した。おそらく信雄の

写真2



楽山園（浅香百太郎氏提供）

晩年は孔子と重なるであろう。武将としては無能であっても楽山園を残す信雄はやはり仁者であったと見るべきである。徳川の世、元和偃武の時代に楽山園の建設から城下町小幡が発していることを考えれば、信雄の意気のかかった楽山園であることがわかる。

楽山園は平和のシンボルである。元和偃武、*pax Tokugawana*のシンボルとして建設されている。庭の中身に目を転じると、築山を砦に見たて、臥牛石、馬鞍石など平和のシンボルに相

応しい石が組まれている。中国に「⁶⁾ 歸馬放牛」なる有名な故事がある。「歸馬放牛」とは『書経』武政篇に出てくるが平和を象徴したものである。築山を崑山に見立て臥牛石、馬鞍石を配した。周の武王が殷を滅ぼした時、戦いは止め平和の世でありますよにとの願いを込めて崑山の陽に戦馬を帰したことを念頭におき、pax Tokugawanaの出発点として樂山園が完成したことを考えれば、これ以上の庭園は外に見ることができまい。歴史的事実、歴史的遺産としてこれ以上のものがあるだろうか。

富岡製糸場の整備と城下町小幡との決定的な違いは歴史認識、観光とは何かの意識の違いにある。近代社会では歴史は一般に歴史的事実を記録したことを指している。だが、本来の歴史はある時点での歴史的事実と次の歴史的事実との相違を、なぜそうなったのかを検証することにある。これが本来の歴史である。そこにはA地点からB地点への本来求むべき理想像はプラトンのいう姿が貫徹されている。ところが、富岡の場合A地点での姿を本来の姿とは見なかったところに決定的な相違が生じ、A地点での理想像を理想像とは考えずにB地点において貶めてしまつてところに歴史認識の相違があると言っている。B地点での貶められた理想像を本来のそれとして追い求めてしまったことに尽きる。本来の理想像を貶め、貶めたとは気づかずに世界遺産への道をつつ走ってしまった点にあるといえよう。これは政治情勢の激変によつてもたらされたものである。前政権は少なくとも富岡製糸場の世界史的価値は認識していたはずである。そのつもりで整備していたし、製糸場の理想像とは何かを検討し世の移り変わりは気にせず本来の姿を追求していたと見ていい。

歴史への関心は直接、間接に観光と結びつく。観光、「⁷⁾ 観国之光」は文字通り「国の光を観る」ことである。では、具体的に「国の光を観る」とはどういうことか。『易经』は続けて「尚賓也」（賓を尚ぶ）ことであると教えている。「国の光を観る」だけでは真の観光にはならない。なぜか、さらに訪れた人を「尚」ばなければ不十分であるからである。国の光を観せると同時に観光客を尚んでこそ本来の観光を実現することになることを『易经』は教えている。だが、こうした観光意識をもたないところが一般に多いのではないだろうか。歴史認識の欠如の外に経済主義に陥ってしまい、本来の観光から「ずれ」てしまっているからである。そこで一般に陥りがちな観光地の経済主義について考えてみよう。

3. 経済主義の弊害

経済主義が前面に押し出され、物売りが観光地の代名詞のようにになっている所が少なくない。観光客に光を見せかつ尚ぶのであれば歴史的に裏付けられた商売でなければなるまい。商売の原点は石田梅岩ではないが「売り手の幸せ買い手の仕合わせこそ商いの本意なれ」ではなかったか。では、なぜ経済主義が歴史を貶め、観光地を貶めてしまうのか考えてみよう。

Ioniaにおいて旅をするときによく使われた *κατὰ ἐμπορίαν καὶ κατὰ θεωρίαν* (商業と見物のために) という言葉がある。異国を旅するとき交換するものを持っていかなければならないため見物とともに商業が使われた。異国を旅し各地を訪ねその土地を知ることが旅の目的であった。山や川 (*γεωγραφία*) などを知るほかにその土地土地に伝わる言い伝えや伝説などの物語 (*λογογραφία*) を見聞することが旅の目的であった。旅費代わりに交換するための代替物が必

要であった。物々交換によって旅費を工面したわけで、商業が使われているのはそのためである。あくまでも他国を見ることが目的で、そのための費用として商業が使われているのであって商業が目的ではない。あくまでも、他国を旅し高い教養や文化を習得するための手段として商業という言葉が付随しているに過ぎない⁸⁾。とすると他国への観光は高い教養と文化に接し、それを少しでも身につけ教養と文化を高めるために観光の目的があることがわかる。異国での交換はその土地で使われている物である。共通の貨幣がない時代宿泊から飲食、土産などは現地の産物であるはずである。ここに観光地における商業の原点がある。元来観光地における商業主義などはなかったことを知る必要がある。ところが近代になると商業主義が前面に出てくる。観光地とは関係のない産物まであたかも現地の産物であるかのように販売されている。観光地とはなんら関係のない物が名産のごとく売られている所では客を尚ぶことにはならない。よその品物の販売では観光地を貶めてしまうのは当然であろう。

経済主義がはびこるところ観光地の価値は次第に低下せざるを得ない。Werner Sombartの“*Duecher Sozialismus, 1934.*”を援用することによってこの問題にアプローチしてみよう⁹⁾。ゾンバルトは経済主義がはびこる所では本物の文化は育たないと明言している。一種Halbkultur（半端な文化）しか育たず、作品の出来映えが低下してしまうという。経済主義が大手を振るうようになると「人間の心は情操ゆたかな心情を求めつつ、荒み、無常で、不安で、あわただしくうつろで、冷ややかなもの¹⁰⁾」になってしまう。観光客に光を与えるどころではなく、観光客を尚ぶことにはならない。さらに経済主義が貫徹するところ、いかに売り上げを伸ばすかに心血を注ぐため観光本来の姿を喪失してしまう恐れがある。観光学は観光ではなく観光学学に、売上高が観光の関数に貶められてしまう。観光地はどの程度入場者が訪れたかによって評価され、売り上高によって評価されるという本末転倒した現象として立ち現れる。極論すれば、観光は経済の関数に貶められてしまうということである。こうして観光地の浅薄化が進む。あるいは軽薄化といってもいい。質の評価ではなく、量の評価によって、greatnessではなくbignessが問われるにすぎない。それゆえ、国の光を見る、国の光を見せることが無意味となってしまう恐れがあるということである。こうなれば観光客を尚ぶどころの話ではなくなってしまう。多かれ少なかれ経済主義が貫かれるところ、こうした傾向に陥っているところが多いことは否めない。

本来ならば観光地は歴史的価値に鑑み歴史に関する素材が販売の対象になるはずである。土産物にしても歴史的素材を生かした商品ということが本来の姿であろう。歴史認識から逸脱した商売は現地の素材以外ではありえないはずである。経済主義は売り上げ至上主義にはしるため現地の素材を無視して、よそから手軽に取り入れあたかも産地化したように振舞う。観光客のためといいながらよその名物をあたかも観光地の名物として販売するというのでは真の観光にはならない。これでは個性が失われてしまうのは当然であるし、観光客にたいして「二枘を搔く」ようなものである。商売の本質は「有りべかりの心」にあるはずではないか¹¹⁾。赤心、真心が商売の根底とするならば、経済主義による売り上げ至上主義では観光地がもたない。こうした意味においても、今日、観光地は経済主義から一刻も早く脱却して本来の姿に戻る必要がある。長い目で見れば歴史を真に生かした観光地の形勢になり得ようから、そうした方向に向けて大きく舵を切る必要がある。

4. 歴史と観光の真意

もともと旅は苦勞しながら巡礼的要素を持って始まっている。旅, travelは苦痛を意味するラテン語のtrepalium (tres=three, palus=pale) に由来することを見てもわかるように、元来苦勞をともしながら見知らぬ土地を旅し見聞を広めるという意味に使われていた。だから異国を旅し見聞することは文字通りtrouble (苦痛) であったのである。旅はwork hard (厳しい勤め) であり, painful effort (苦痛を伴う努力) がつきものであった。このことは巡礼を考えればよくわかる。旅の原点が巡礼的要素を持っているとすれば、命がけの仕事であったと言える。「えじゃないか、えじゃないか」の掛け声とともにお伊勢参りに興じた幕末の群衆も、一種旅の原点を示しているかも知れない。旅をこのように見てみると歴史、歴史的遺産への取り組みも慎重にならざるを得ない。ましてや商業主義、経済主義に陥っている観光地は大いに考えを改める必要があろう。物を買うことが旅の目的ではない。心を豊かにしてくれることがまず先である。歴史的事実や歴史的遺産に触れ心が洗われることこそが本来の姿であり、観光が国の光を見る、客を尚ぶところにあるとすれば、世界遺産に向けてということが先にたち歴史的事実を破壊したり、新たに付け加えたりすることは歴史を歪めてしまうし、また観光をも歪めてしまうことになりかねない。そういう意味で、わが国の世界遺産への取り組みは大きな曲がり角に來ていると見ていい。

そこで歴史的事実、歴史的遺産、観光についてイギリスとドイツの例を紹介しておこう。まずイギリスであるが、世界に先駆けて設立した団体に“*The National Trust for Places of Historic Interest and Natural Beauty.*”「歴史的遺産・自然的景勝地のためのナショナルトラスト」がある。¹³⁾産業革命後のイギリスにあって歴史的遺産やかけがえのない自然、自然的景勝地が消滅していくことに耐えられない、と民間の団体が立ち上げたもので、すでに一世以上が経過している。ここでは歴史的遺産についての取り組みを紹介しておこう。ひとつはロンドンのチェルシー地区にあるカーライル・ハウスについてである。カーライル・ハウスはナショナル・トラストの資産でも古い方である。大歴史家トーマス・カーライルが文筆活動を行った家そのまま保存されている。何の手も加えず生前活動したそのままの姿で一般公開されている。駐車場などはない。カーライルを訪問し心洗われればそれでよいわけで訪問者の利便性など少しも考えてはいない。歴史的現実が心に訴えるものであればどんな苦勞 (trouble) してまでも訪問したくなるのが旅行者 (traveler) の心理である。優れた歴史的遺産があれば巡礼者ならぬ現代の訪問者は労いとわず尋ねたくなる。このハウスは決して華やかではない。実に質素である。しかし歴史的現実が訪問者の心を捉えてはなさない。観光地なるものとは無縁である。商業主義とはまったく無縁である。筆者が訪れたとき、日本人であるということでわざわざ奥から分厚い古びたサイン帳を取り出してきて「よく見てください」という。小さな文字で夏目金之助とサインされていた。あの夏目漱石である。漱石がロンドン留学のとき訪れた証であった。カーライル・ハウスを最初に訪れた日本人ということでわざわざ見せてくれたわけである。ここに客を尚ぶという精神が生かされている。筆者はその後何回か訪れた。建物が優れているからであろうか。決して優れてはいない。ごくありふれた家屋である。なぜ訪問したくなったのか。カーライルの生き様に触れたかったからである。それ以外に理由などない。

次にドイツのワイマールを紹介しておこう。ワイマールといっても今ではびんと来る人は少なからう。しかしワイマール憲法と言えば、あのワイマールかと気づいてくれるはずである。人口6万人程度のワイマールが並み居る由緒ある大都市を差し置いて文化都市に指定された理由が一步踏み入れたとたん納得できた。何しろ町全体が豊富な歴史、価値ある歴史的遺産で溢れている。人目を引くのがゲーテ・ハウス、シラー・ハウス、パウハウス、リスト・ハウス、ローマンハウス、ニーチェ文庫、国立劇場、劇場の前に立つゲーテ・シラー像など数え上げればきりが無い。ワイマールには歴史的モニュメントが30以上もあるが、これだけでは物足りないといって憚らない。ワイマール子そのものが文化遺産だというのである。この自信はどこから来ているのか。目を歴史的事実に転じてみると納得がいく。ゲーテ、シラーを始め歴史上著名な文化人、芸術家が住み創作活動、文化活動を展開したという歴史的事実が燦然と輝いているからである。たとえば、ゲーテの「ファースト」やシラーの「ウイリアム・テル」が初演された国立劇場、その前に立つゲーテ、シラー像は圧巻である。ワイマールにはとびぬけて大きな建物などはない。それでも中身が濃いため人を惹きつける。もちろん世界遺産に登録されている。ワイマールには二つの世界遺産が登録されている。ひとつは「ワイマールとデッサウのパウハウスとその関連遺産」(*Bauhaus and its Sites in Weimar and Dessau, 1996.*)であり、もうひとつは「古典主義の都ワイマール」(*Classical Weimar, 1998.*)である。ワイマールには喧騒な雰囲気は皆無である。訪れる人はゲーテ・ハウス、シラー・ハウスに立ち寄り精神的所得 (psychoincome) を得て、国の光を堪能して帰っていく。広場で余韻に浸り、友人知人と楽しんでいる。実に物静かだ。時々笑い声が聞こえる程度で周囲の歴史的建造物群と調和している。観光地とはこういうものかと考えさせられる。

なぜこうした雰囲気を醸し出しているのか。先のカーライル・ハウスといいワイマールの雰囲気といい訪れる人を虜にせずにはおかない。ここには近代的なドラステックな政治情勢の変化が歴史、歴史的遺産に影響していない。カーライルの精神、ゲーテやシラーの精神をよく見てそれを理想像に仕上げてまちづくりに生かしているという事実である。ここでは *θεωρία-πολιτικά-ιστορία* が三位一体としてたち現れている¹⁴⁾。カーライルやゲーテ、シラーをよく見て理想像として追求しているから政策が「ぶれ」ずに追求し続けることができるわけである。カーライル・ハウスとゲーテ・ハウス、シラー・ハウスは歴史、歴史的遺産とは何か、また観光とは何かを余すところなく伝えているように思えてならない。

5. 今後の展望

これまで筆者はギリシャ、イタリア、イギリス、ドイツ、フランス、スペインなどヨーロッパを中心に世界遺産を数多く訪ね歩いてきた。訪ね歩いているところ全てを記すわけにはいかないのとくに印象に残ったものを上げておこう。まずギリシャであるがなんと言っても圧巻なのは、古代ギリシャ建築の最高傑作を直に見ることができる「アテネのアクロポリス」(*Acropolis, Athnes, 1987*)である。2500年前に築かれたパルテノン神殿を始め、アテナ・ニケ神殿、エレクトイオン神殿、プロピュライア（前門）など古代ギリシャ建築が一堂に会している。重厚なドーリア様式に優美なイオニア風を加えた建築技術の代表であると言われてい

写真3



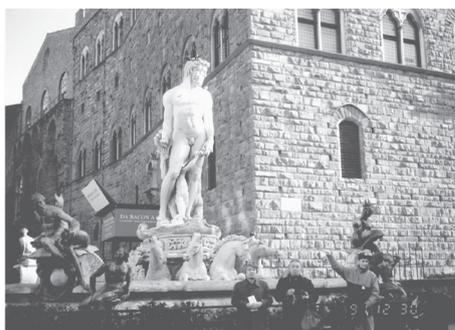
アクロポリス, アテネ (筆者撮影)

る。見るものを圧倒して止まない。イタリアでは数多く尋ねているが古代ローマと優雅な都市フィレンツェを上げるに止めておこう。「ローマ歴史地区, 教皇とサン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ教会」(*Historic Center of Rome, the Properties of the Holy See in that City Enjoying Extraterritorial Rights, and San Paolo Fuori le Mura, 1980, 1990.*) この地区は非常に有名であるので説明は要しない。次に上げる花の都「フィレンツェ歴史地区」(*Historic Center of Florence, 1982.*) も圧巻である。イギリスはどうか。イギリスも数多く

訪ね歩いたが古代ローマを手本にした優雅な「バース市街」(*City of Bath, 1987.*) とスコットランドの首府エディンバラの旧市街と新市街」(*Old and new Town of Edinburgh, 1995.*) を上げておく。バースはバディントン駅からインターシティで約1時間のところにあるのでよく通ったものである。ローマ人が開いた町でローマ人は温泉が好きだったので温泉にちなんで風呂(Bath)という地名がつけられた。イギリスにあってローマ風の佇まいに浸ることができる優雅な街である。エディンバラへはアダム・スミスの生地カーコデイへ足繁く通ったのでそのつど訪れている。旧市街地はエディンバラ城を持ち圧巻である。ドイツはなんと言っても「古典主義の都ワイマール」(*Classic Weimar*) である。それにカール・マルクスの生地「トリアのローマ遺跡, 聖ペトロ大聖堂と聖母マリア教会」(*Roman Monuments, Cathedral of St. Peter and Church of Our Lady in Trier, 1986.*)

ワイマールについてはすでに触れたのでトリアのローマ遺跡に触れておこう。筆者はカール・マルクスの生地に行くたびにこのモニュメントの前を通り資料館によく行ったものである。トリアはドイツ最古の町であるだけに重厚な趣がある。ちなみにマルクスはボン大学へ行くまでこの町で過ごしている。フランスにも足繁く通った。特にチャンネルトンネルが完成してからはイギリスから日帰りができるためイギリスにいくたびに足を延ばした。特に「パリのセーヌ河岸」(*Banks of the Seine in Paris, 1991.*) は北駅に近いのでよく訪れた。セーヌ河畔, ノートルダム寺院を散策した。もうひとつ「ベルサイユ宮殿と庭園」(*Palace and Park of Versailles, 1979.*) であるが, これは説明は不要であろう。最後にスペイン

写真4



フィレンツェ, ショーニャ広場 (筆者撮影)

写真5

エディンバラ (旧市街)
(筆者撮影)

をあげておく。「古都トレド」(*Histric City of Toledo, 1986.*)ならびに「セゴビア旧市街地とローマ水道」(*Old Town of Segovia and its Aqueduct, 1985.*)。セゴビアの古代ローマ人が築いた水道は見事である。最初に行ったときはその大きさに圧倒された。よくもこれほどまでの物を作ったものであると驚かされた。トレドには思い出がある。バスの連絡が悪く駅まで歩いた記憶がある。振り返るたびにその荘厳さに感嘆した事を昨日のように思い出す。そのほか北欧、ソ連、中国、東南アジアなどの世界遺産を数多く見てきたが、なぜこうした手続き図ったかということに上げた世界遺産に共通性があるからである。近代に入ってから遺産ではないということである。つまり近代に入ってから政治的な変化によって大きく変化するようになるから理想像を維持しづらいという点は否めない。

これらの地域は風格が漂っている。それはいつも変わらぬ姿を求めて理想像を見失わなかったからである。だから観光地として光を放っているし、訪れる人を尚ぶことができるわけである。これと反対のことは近代社会にあっては政情の激変が繰り返されるために似ても似つかぬ姿に貶められていることに気づかず、あたかも理想像であるかのように錯覚してしまう。それどころか世界遺産に登録ということが前面に押し出され、初めから理想像からほど遠いところで準備にあたることも出てくる。世界遺産ありきでは本物のまちづくりはもとより、歴史的事実を歪めてしまうことも起こりうるであろうから慎まなければなるまい。それよりも町づくり地域づくりの結果として世界遺産へという方がはるかに理にかなってよう。

今、世界遺産登録に向けて大きな曲がり角に来ている。問題なのは無理をして何が何でも世界遺産にということが先走って本来のまちづくり、地域づくりをないがしろにはしていないかという危惧である。迷ったら原点に帰れないが、決して遅くはないはずである。日本中が世界遺産登録にという風潮の中で原点に立ち返る勇気が今こそ必要なのではなからうか。国も県も市町村もこの点をよく考えてほしい。

(やまざき ますきち・本学経済学部名誉教授)

〔注〕

- 1) 横井小楠は岡山の開谷学校にも水戸にも精通していた。だが、小楠の評価は分かれる。小楠は嘉永四（1851）年上国遊歴中岡山に立ち寄っている。その際「開谷学校」に足を運びつづさに観察している。熊沢蕃山を招聘しているので陽明学が盛んであると思いきや実は程朱の学が主流で陽明学は浸透していない点を見抜き、池田光政を名君として褒め称えている。「三代以上の御方」と信じられないほどの言葉を贈っている。学校本体については質素儉約の風が気に入っている小楠にとって、作事が施された建物について「江戸聖堂之外は天下に如」此壯麗の学校は有_三御座_一間敷被_レ存候」（「遊歴見聞書」837-842頁。「横井小楠関係史料Ⅱ」日本史蹟協会、昭和52年）。だが小楠は開国論に転じて以来水戸、水戸学批判に変わっていく。尊攘批判である。小楠と水戸とでは大きな隔たりがあり埋めることは困難であった。安政5年には水戸への痛烈な批判がとび出る。驚くことに「水毒は恐敷き事」であるというのである。（「下津休也、荻角兵衛、元田伝之丞宛て書簡」安政5年6月18日、「横井小楠関係史料書Ⅱ」前掲書、260-262頁）弘道館正庁の間には「尊攘」と大書してあるが、今日これをどう解釈したらいいのか。すでに

小楠は150年以上も前に「水毒」とまで言っている。閑谷学校の評価と水戸学への評価をどう調整するのか気になるところであるが、ユネスコがどう判断するか非常に興味深い。

- 2) 「経済学における理論と政策と歴史—その内面的関連について—」(「社会哲学序説」難波田春男著作集Ⅰ』早稲田大学出版部, 昭和57年) 参照。
- 3) 『富岡製糸場の整備活用計画について(計画書に対する意見)』1-4頁。(NPO法人富岡製糸場を愛する会, 平成22年4月27日 理事会決議)
- 4) 拙稿『市民の支援と産業遺産の関わり』(『群馬産業遺産の諸相』高崎経済大学附属産業研究初編, 日本経済評論社, 2009年) 参照。
- 5) 「子曰, 知者楽水, 仁者乐山, 知者動, 仁者静, 知者楽, 仁者寿」(『論語』雍也篇)。
- 6) 「帰馬干崑山之陽。放牛干桃林之野」(『書経』武成)。
- 7) 「觀国之光。利用賓于王」, 「觀国之光, 尚賓也」(『易经』周易, 上, 経, 觀(風地觀))。
- 8) 前掲書, 『難波田春男著作集Ⅰ』188頁。
- 9) Werner Sombart, “*Duecher Sozialismus, 1934.*” 難波田春男訳『ドイツ社会主義』(『難波田春男著作集10』早稲田大学出版部昭和57年) . 第1編「経済時代」, 第1章「バベルの塔」, 第2章「社会と国家の構造変化」第1節「社会内部の崩壊」第2節「生活様式の変化」第3節「公共生活の変化」, 第3章『精神生活』(1-52頁) 参照。
- 10) 前掲書, 44頁。
- 11) 『都鄙問答』(柴田実『石田梅岩全集上巻』清文堂出版株式会社。平成6年) 参照。
- 12) 一般化しているtourはcircular movementという意味で, turnを意味していた。ラテン語ではtornusであるがjourney of visit訪問するという意味では使用されていない。circuitous journeyでturnが基本であったようである。その後, 教育的見地から若者がヨーロッパでは各地を回って教養を高めるためにしきりにtourに出かけた。これがgrand tourで回ってくるということが旅の本質であった。各地の歴史的事実(物語)や歴史的遺産に触れ人間性を磨き, 将来に備えたわけである。この件はAdam Smithが『国富論』“*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, 1776.*”で述べているので紹介しておこう。「イングランドでは, 若者が学校を出るとどこの大学にも上げず, すぐに外国漫遊に出すことが日に日に習慣となりつつある。総じて, この外遊においておおいに進歩して帰ってくる, と言われていいる。……(この外遊で) かれはうぬばれが強くなり無節操な放蕩者になり, 学問にも, あるいは実務にも, まじめに打ち込めなくなって帰ってくるのが通例で, その程度たるや, もし故国で暮らしていたら, こんな短期間に, とてもあまになれまいというほどである。……人生の早い時期に外遊するというようなばかげた習慣がこれまで好評をもって迎えられたのはとりもなおさず大学がみずから甘んじて落ち込んだ不信用をおいてほかにない。息子を外国にやっておけば, 父親は, 職もなく, 人からは相手にされず, 自分の前で破滅していく息子などという, 何ともやり切れぬしるものを少なくともしばらくのあいだ見ずにすむということなのである」(大河内一男監訳『国富論Ⅲ』中央公論社, 1976年。第5篇, 第1章, 第3節第2項「青少年の教育のための経費について」131-133頁)。

grand tourは18世紀中葉以降大ブリテンを被った海外旅行熱で, tourは文字通りturnであり, どこを回ってきたかというメインコースはフランスかイタリアであった。興味に応じて

オランダやドイツ、ギリシャまで足を延ばした。当時（1758年）イギリスからは大陸へ1758年に4万人が旅行していたか、あるいは長期滞在したといわれている。（『国富論』の注131-132頁参照）。このほかtripが使われるがmove lightly or nimblyという意味で軽やか、素早く移動するshort journeyであろうから、光を見る事からはほど遠い。journeyはどうか。day's travel, day's workという意味でどちらかといえばworkに力点がおかれているようである。excursionはcourseからはずれるという意味であろうが、runが本来の意味であるから旅というイメージはない。したがってtravel, tourが旅の中身をよく表わしていることが分る。

13) ナショナル・トラストの生成と発展についてはRobin Fedden “*The National Trust—Past and Present 1974.*”（四元忠博訳『ナショナル・トラスト—その歴史と現状』時潮社、昭和59年参照）。さらに毎年出版されている“*The National Trust HANDBOOK for Members and Visitors*”を参照されたい。

14) *θεωρία*という言葉はその後イオニアから本土ギリシャに入るとPlaton, Alistotleを経て知的観賞、学問的研究を意味するようになり、その結果できあがった理論を指すようになった。*ιστορία*の方は世の移り変わりを追探求すること、その結果できた記録からそのように記録されている移り変わりそのもの、つまり歴史的現実そのものを指す言葉として使用されるようになった。（難波田春男、前掲書、190頁）。